

連載
111

言葉と発達

いまどき子育て
アドバイス



「ことばの遅れ」 とは？ (3)



言語聴覚士
中川信子

言語理解、
状況理解をめぐって

大上段にふりかぶって書き始めた『「ことばの遅れ」とは？』ですが、書いている本人が書けば書くほど、書いている本人がわけがわからなくなってくるというありさま。多面的な子どもダイナミックな実態を、単線的な文字で表していくという作業は、本当に難しい。

ビデオを見ながら「ほら、こここのころのAちゃんの視線の向け方を見てください。もう一度巻き戻しますね。ほらほら、こんな具合ですよ。はい、そして、今度はBちゃんです。視線の向け方、ほら、違うでしょ？ ね？ そして、今度は、体の使い方です。滑り台をすべり終わったAちゃんはこのうふうにその場からすーっと離れて行きましたが、こちらのBちゃんは、ほ

らほら、こんなふうにはすべり終わった場所にしぼしぼとどまっています。違うでしょ？ もう一度巻き戻して見てみましょうか？」って説明すれば、一度で伝わるころ。百聞は一見にしかず、とは言いて妙なり。でも、始めてしまったからには、最後まで貫かないとがんばります！

そして、各市町村の『健診マニュアル』記載の判断基準や視点は、子どもをスクリーニングしていく上では、ほんとに、正しい視点だと感心してもいます。

ただ、保健師さんの仕事は「スクリーニングしてハイ終わり！」ではないはず。見た目には同じスクリーニングでも、深い子ども理解に裏づけられているスクリーニングであってほしいと願って、くどくど書き続けている次第。次回で完結の予定です。編集担当の飯間さん、ご苦勞をかけます（ぺこり）。

るには必要な視点です。

私たちの愛用の品は

①「ピックアップパズル くだもの（8400円）」。オランダ製なので、梨や桃が日本のものとはちよつと違いますが、バナナ、トマト、いちごなどは同じ。学研のサイトで「<http://kids.gakken.co.jp/campus/jintu/pickup/frame.html>」ページの下の方、教材紹介の中に載っています。

②クーゲルバーン（1万3440円）。ブラザージョルダン社が輸入していますが、同社のサイトからは探しにくいので、おもちゃ紹介サイトからどうぞ。[\[http://sumitaya.cup.com/buraza.htm\]](http://sumitaya.cup.com/buraza.htm)小さな軽い玉を穴から入れるとコロコロ転がって、金属製の鉄琴の階段でリンリンリンリンと、きれいな音をたてて落ちるというもの。

類似のものはたくさんありますが、この二つはすぐれもの。値段は高いで

「理解の状態があやふや」な場合 自然な流れの中での観察

「音声言語（有意味語）が出ていないか少ない」ことが心配なだけでなく、「理解の状態もあやふや」な状態のお子さんたちの理解度をです。机上課題で調べるのは簡単なことです。でもが、調べたいな、と思う子に限って、机上課題には応じてくれない可能性が大きい。それに、そういう、ちよつと気になる子の親御さんは、通常以上に「試される」「テストされる」場面に過敏。余分なプレッシャーは与えたくありません。それでいて、きちんと評価（アセスメント）もしたい。そのためには観察です。私がかかわっている、2歳前後の子の個別相談の場で、理解のようすを観察するためにルーティンとして保健師さんたちが行ってくださっているのはおおむね次のようなことです。

すが、調布ではもう20年使っています。すぐに壊れてしまうプラスチック製のおもちゃに比べると、ずっと割安。それに、遊ぶこちらがうれしくなるのが利点です。

追視のようす、手指の器用さ、玉の流れを途中で止めて「ヨーイ、ドン！」の号令に合わせてたくさんの玉を一挙に転がすルールを理解できるか、鉄琴の音を聞いているようすがあるかどうか、どのぐらいの時間集中できるのか、玉が「後ろに転がったよ」「ひざの横にあるよ」などの指示が理解できるかどうか、など、遊びの展開に合わせていろいろなが観察することが可能で

す。難点もあります。玉が小さいため、赤ちゃんと同伴の場合には目を離すと口に入れるので危険。また、玉が行方不明になりやすいため、グループ活動の時には使えないことです。

1）入室時に「くつしたを脱ぐう」。（脱いだくつしたを）ママに上げて」という指示。

2）ままごとおもちゃを使つての理解の観察。

面ファスナーで接合している野菜や果物やケーキを包丁で「ざくつ！」と切るおもちゃ。昔は「ままごとトント」と言う名前でしたが、今は「ハローキティやさいだいすき」「ハローキティのくだものおいしいね」などと名前を変えているらしい（発売…トナー1セット7000〜10000円程度）。

これをざくつ！と切つたりお皿に盛つたりして遊びながら、さりげなく「いちご、ちようだい」とか「今度はトマトを切るうか？」「きゅうり、ママにあげよう」「バナナ、トラックに積もうかな？」などと言つて指示理解のようすを観察します。

3）操作玩具の扱い方も認知発達を見

自然な観察をメインとするが、 机上検査の場合の留意点

とりあえず、右記のようにおもちゃを使つて、おもちゃの扱い方、指示理解のようす、おとなのすることへの注目のようなすを観察すれば「理解」の程度も、コミュニケーションのとり方もだいたい推し測れるでしょう。ポイントは「決まつたよいおもちゃを使う」ことです。多用途に使える、本当によいおもちゃは数少ないですね。

養護学校の先生のサイトがあります。自作教材中心なのですが、この中には、小さい子たちに向けた「よいもの」がいろいろ紹介されています。「遊びの教室」のヒントにもなりそうなのでご紹介しておきます。[\[http://www.asahinet.or.jp/~ue6skzk/\]](http://www.asahinet.or.jp/~ue6skzk/)

机上検査がルーティンになっている自治体では、積み木、簡単なはめ板身

体部位理解などを題材に理解をみていると思います。「決まった道具で、決まった手順で」実施することに意味があるのですが、そういういかにもテスト的なやり方だと、親御さんの方が試されていると感じて、スタッフに不信感を持つたり、スタッフの側も「できる一できない」の振り分け的な見方になってしまう危険があるということ、よくわきまえた上で行うことを強調しておきたいと思います。

発達質問紙等

さらに掘り下げる場合のために、いくつかの簡便な発達検査があります。心理相談員が参加する自治体では、心理の人が担当するでしょうが、アセスメントは子ども理解の入り口。簡便なものは、保健師さんも勉強して身に付けておくというのではないかと思います。質問紙形式のおすすめは三つ。

うのだ。そのことを決して忘れてはならない」とも。

「理解にムラがある」お子さんで関係が希薄な場合、さらに……

さて、こうしたあの手この手を繰り返しても、やっぱり、おくてタイプなのか、発達に遅れがあるのか、発達障害の範疇での発達アンバランスなのか、判断が難しいお子さんたち。

「うーん、標準に比べれば確かに遅いですねえ、でもだいたい伸びも見られますねえ、ではまた三カ月後に」ってお茶を濁しながら、だんだんに状態像が固まっていくまでお付き合いするといことが多いです。いくら長くやっていても、見極めは年々難しくなっています。

親御さんが「分かる時もあるんですけど、あれ？分かってないのかなって思うときもあって、よく分かりません」とおっしゃいます。

①「遠城寺式乳幼児分析的発達検査法（慶応義塾大学出版会）。手引書は735円、質問紙は50人分で525円という手ごろさ！ 簡単です。ごくごくおまかな目安に。

②「津守稲毛式乳幼児精神発達質問紙（大日本図書）」質問紙は0～12カ月、1～3歳、3～7歳の三種類に分かれており、一部210円。手引書は0～3歳、3～7歳に分かれていてそれぞれ2345円と1835円です。これは定評のある質問紙ですが、項目数が多くて聞き取りはなかなか大変。
[http://www.dainippontoshocorp.jp/shop/default.php/cPath/71_72]

③「日本版デンバー式発達スクリーニング検査」 発達の幅を勘案しつつ、聞き取りと実際の操作を観察する項目との両方を使って、子どもの実態を把握する検査。手引書は医歯薬出版、から出ています。検査用紙は竹井機器工

決まりきったこと、言ってみればパターン化したことは、よく分かります。「お出かけするよ」と言えば、ささっと玄関に行ってクツをはき、お母さんが来るのを待たずにどんどん出ていきそうになる。「ゴミばいして」には応じられるのだが「そのコップ持ってきて」には無反応。

自分がやりたいと思うことに、うまくはまることであれば、すぐに行動に移せるけれど、相手の動きをよく見て、全体の状況判断をしているとは言いがたい。そんなお子さんたちです。

単なるマイペースなのか、子どもらしい外界への無頓着、シングルチャネル（ひとつのことに気をとられると、他のことがお留守になる）なのか、判断が難しいところ……。しかも、こういうタイプのお子さんがどんどん増えて来ているような感じです。

「『障害』とは言い切れないけれど、ちょっと気になる」そういうお子さん

業。[http://www.okada-shinri.com/fin/chinou/c025.html]からご覧になれます。

ただ、検査はあくまでも目安。自分の目を磨くことが一番大事です。

私の師匠である故・三木安正先生は障害児教育と教育心理のリーダーでしたが、先生は常にこうおっしゃっていました。「子どもを見て、その子の発達の程度、障害の程度、得意不得意、どうかわつたらいいかが、たちどころに分かるのがプロ。でも私たちは、なかなかそういう境地には到達できない。だから、代わりに検査ということをするのだ。テストをするときには、常に『私の実力が足りないためにテストをさせてもらうが、ごめんね』という気持ちを持ってやりなさい。テストの結果を見て、自分のほうが偉いと思うのは、とんでもない思い違いだ」と。

また「テスト、検査は、その後の子どもの指導に生かすためにさせてもら

たち。たとえ拾い過ぎだと言われても、早めに望ましいかわりの場につなげてあげたいと思います。

ただ問題は、そういう「早めの望ましいかわりの場」がなかなか整備されないこと。保健分野での「フォロー教室」「遊びの教室」はみなさんのご努力で充実してきてますが、それ以降の確実な受け皿の不備。

従来、障害と決められない子も受け入れていた乳幼児療育機関が、支援費制度導入で「児童デイサービス」と位置づけられて費用負担が発生したことで通いにくくなり、さらに今回の障害者自立支援法適用で障害の認定や手帳取得が通所条件とされたり、料金が跳ね上がったところもあると聞きます。

早期に見つけて早期支援につなげようと努力しているのに、肝心の支援が閉ざされている現状、全く割り切れない思いでいっぱいです。